2014年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

栄養・食からの国際協力の基礎となる「国際栄養学特論」テキストの構想

■主任研究者　足立己幸

■共同研究者　佐藤都喜子、安達内美子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】　2011年度から継続して検討してきた「栄養・食からの“国際協力”力の形成」に関する研究の第3期にあたる。1期では国際協力希望者の課題分析をし、2期ではその基本課題となった「栄養・食教育の理論的理解の不足」を充実する一助とするための、Isobel R. Contento著 “Nutrition Education ―Linking Research, Theory, and Practice”の日本語訳を完成し「これからの栄養教育論―研究・理論・実践の環」として出版した（監訳者足立己幸・衛藤久美・佐藤都喜子。安達内美子は訳者の一人。4月10日に第一出版より出版）。第3期に当たる本年度では、全国的に例が少ない栄養学分野での国際協力教育に広く役立つテキストの内容案を作成した。

【方法】　本学大学院修士課程での「国際栄養学特論」の講義を担当する中で抽出してきた課題を整理し、学生側の実態に寄せた形で「国際栄養学特論」テキストの構成を検討し、内容を再編した。

【結果】　世界各地の栄養・食の問題を検討するに当たり、ジェンダー平等や公正は女性や子供をはじめとした家族の栄養・健康の改善や維持のために不可欠である。その一方で、ジェンダー平等や公正を達成するためには女性のエンパワメントの推進が必要である。このような視点に立って、本テキストでは、男女双方にとっての「人間らしい生き方」をめざした、グローバルなレベルでの生活の質と環境の質の両面と、その共生を高めるような栄養・食活動の進め方を論じることとした。具体的には、栄養・食活動をどう進めるかについての基礎的理論と実践の2部構成とし、大学院の前期と後期の2期にわたって学習する内容とした。

キーワードは国際協力、人間らしい生き方、基本的人権、女性のエンパワメント、地域性、食・栄養の問題と要因構造、アセスメントと方策、教材づくり、評価に向けたプロジェクトサイクルマネジメントとした。